

【福島大学むらの大学アーカイブ 24】【南相馬 Chapter 9】

安心・安全なお米のために、

日々学び続ける

根本有機農園 根本洸一さん



インタビュー日時：2024年9月26日、11月4日

インタビュー場所：根本さんご自宅

聞き手：斉藤優人、菅野結花、夏堀響生、松野綾、前川直哉

プロフィール

1937（昭和12）年3月22日、南相馬市小高生まれ（インタビュー時87歳）。

小高農業高等学校を卒業後、家業の農業を継ぐ。平成12年に有機JASの認証を取得し、安心安全な米づくりに尽力。妻の幸子さんにもお話を伺いました。

★農家で育つ

ーもともとご実家で農業をされていたのですか。

根本洗一：そうです。私も小学校の頃から農業を手伝っていました。昔は全部手作業だったから、もう学校から帰ってくるとすぐに使われました。遅いと怒られて。小学校の時は庭掃きをしました。(小学)2年になったら今度は風呂のこともして、3年になったら今度、何でも仕事です。高校の時から、野菜を業者に持って行くアルバイトもしました。それでずっと小遣いよかったな。

ー高校卒業後はすぐに農業を継ぐつもりだったのですか。

根本洗一：はい。長男だから、これは宿命だよな。他の職業はなかったです。きょうだいは9人いました。戦前だから、産めよ増やせよで。にぎやかだったよ。

ー農業では何をつくっておられたのですか。

根本洗一：戦前はカイコと田んぼと野菜をやってました。野菜とカイコは現金収入だわな。あと、クワを切ったら皮をむいて、それで何か服作ったのかな。クワの皮っていうのは繊維が強いんだわな。だから、カイコ終わったらそれをむいて干して。俺じゃなくて父ちゃんだけども。タバコもやったよな。あと、イグサもやったな。

ーいろいろ手広くやっておられたのですね。

根本洗一：儲かるもんなら何でも。だって、仕事ないんだから少しでも（働かないと）。お金ないから。しょうがなくって父ちゃんは1年間、出稼ぎにも行ったのかな。そして、最初からこの家の百姓任せられたの。

★有機農業の開始と苦労

ー有機農法、有機栽培にはいつごろから取り組まれたのですか。

根本洗一：そもそも、俺ら百姓がもともとやっていたのは有機農業なんだよな。農薬も肥料もない。堆肥だけ。それが主力だったんだな。

ーなるほど。でも、戦後には化学肥料なども出回りますよね？

根本洗一：そうだな。それと、農薬が。あとは化成肥料出てきた。田んぼにはやっぱり役立ったし、使い勝手もよかったんで。

ー根本さんも、農薬や化成肥料を使っておられた時期もあったわけですか。

根本洗一：うん。最初は堆肥だったんだけど。本当楽し、効果があるし、そうすると、この他にいろいろ余計な仕事入れられるわけだから。カイコ増やすとか、規模拡大できる。今から見たら、大した規模じゃなかったけど。

ーはじめは化学肥料を使っておられて、なぜ有機栽培に変えていったのですか。

根本洗一：有機に変えていこうって言ったのは、それは農協の指導なんだな。農協で、専務が東都生協との関係があったのかな。そこと交流があって、「安全なものが食べたい」っていう要望があって、有機の肥料を使った。そこからだな。俺が30歳の頃かな。

ーなるほど。

根本洗一：世間としては有機って名前を使うと、一般的に高く価値があるってことで。ところが、買うほうからすると例えば、葉1枚でも有機栽培だわな。知り合いの八百屋はよく「葉1枚でも有機だもんな」って言ってる。でも、そうしたことに批判があって、JAS法ができた。農薬、肥料、それから遺伝子組み換えではないとか、そういう基準を作って。その時に、有機農業推進法ができた。あれは平成11（1999）年やったかな。その時忙しかったけど、でも、勉強したんだよ。認可にあたる研究者の会員になって。実際にやったのは平成12（2000）年から。平成12年に申請してJASもらってやった、それからです。

ーJASの認定ですね。それまでは有機といっても特に基準がなくて、もう「言ったもの勝ち」みたいな感じだったんですね。

根本幸子：作っているところも見ないですもんね。

でも作っていて思うのは、有機栽培の人は除草剤を使わないから、田んぼの雑草がすごいんです。だからだんだん有機農家も雑草が出ない方法を勉強して。有機でも「（除草剤を）使ったんでないの？」っていうぐらいに草をなくす方法を、いろいろ勉強しました。うちでも栃木の認可稲作の農家さんのところへ行ってみようって勉強してくるんです。でも、なかなかどうして、今もって草との戦い。毎年毎年、課題。なかなか草のない田んぼは作れないですね。草が出ると減収になります。

根本洗一：草の種ってというのは、すごいんだわな。1株で何千株だから。

ーそんなに雑草が増えるんですか。

根本洗一：だから今年は、変な草を持ち運ばないっていう（ことに気を付けている）。田んぼに入るときは草のないところから入ると。もし、ここ（草の生えた場所）から入る時には、終わるたびに機械をきれいに洗うと。洗えば落ちるのな。だから、こういうふうにしてやればだんだんよくなるかなと思うけど。今年はいろいろやったから、覚えたから来年はもっとよくなる。

根本幸子：「百姓の来年」です（笑）。

ー有機農業を本格的に始められてからは、県外にも勉強に行かれたんですね。

根本幸子：そうですね、勉強します。じいちゃんには本当に普段から、例えば相馬や原町で有機栽培をなさってる方の田んぼを、暇さえあれば見に行くんです。「どうすればいいのかな」って。勉強会にも行きますし。

根本洗一：原町に研究会があって、そこで勉強したり。そういうことは定期的にやってる。

ーその研究会はいつぐらいにできたんですか。

根本洗一：そこは平成 11（1999）年からかな。その前から、民間稲作研究所というグループがあって、そこにも入って色々と、あちこち見たり勉強したりして。それは平成 10（1998）年からだったのかな。

あと、農業を守る会っていうのも、また別にあったんです。そこは大阪の団体と交流があつて。そのきっかけは平成 5（1993）年の大冷害。そこで、向こうでもこちらでも、やっぱり安全なものを提供したいってことで交流して、平成 6（1994）年から出発したの。栽培基準があつて、除草剤は 1 回だけ。化成肥料は使わない。あと、会の指定する肥料。

ーなるほど、平成に入ってだんだんと有機に切り替えていったという流れなんですね。有機のほうが手間はすごくかかると思うんですが、味などに違いはありますか。

根本洗一：もう全然違って。評価も違う。取れないからうまいわな。いっぱい取ってもうまくねーんだわな。肥料がいっぱいあると、米にタンパク質が多くなるのかな。そうすると何か、味悪いのかな。だから、米の品評会なんかやる時には、タンパク質がなんぼとかって基準があるんだ。細かいことは分からないけど、それをクリアしなきゃ駄目なんだな。

ーそうなんですね。つまり、有機だと収量は減るけれども、その分、味が濃いというか。

根本幸子：そういうことなんですね。

ー化学肥料を使っていたところから有機に変える時に、大変だったことについて教えてください。

根本洗一：最初は大変って思わなかった。これらしいことは昔やったし。遺伝子組み換えがあの頃はなかったからな。ただ、除草剤を使わないで雑草をどうするか。

根本幸子：有機に変わった時は、除草するのに何十人っていう人に頼んで。草取り職人みたいに、田んぼの中で這って草取りをしたんです。

根本洗一：（有機農業を始めてから）2 年目にたくさん（雑草が）出たから、あの時は草取り職人がいたな。15 人とか 20 人とかでザーッと並んで。（すっきりして）気持ちよかったな。

根本幸子：きれいになって。

根本洗一：例えば山形の方は、やっぱりみんな（田んぼで草取りを）やってたんだ。でも、それでも結構高く買ってもらったから採算合ったろうな。だけど、この辺の雑草は結構根っこ強いんだよな。根っこまで、なかなか取れないわけ。きれいに見えるんだけど、3 日して行ったら、パッと（雑草が）出てくるんだよ、また。

ー根が残っているからですね。

根本幸子：そう。根っこが悪いのね、根っこが。ヒエは根を引いてしまうと全部取れる。それを丸めて田んぼに埋めると出てこないんですけど、クログワイとかそういう草は、もうしぶとく出てくるんです。

根本洗一：（雑草をそのままにすると）今度はコンバインが回らねーんだ。それが一番ひどかった。だから、草取りの時は「コナギはいいから、クログワイだけ取って」って言って。

根本幸子：カゴを背負って、カゴの中にとった雑草を入れて歩いたり、入りきらないから結局途中で置いたりしていたんです。

ーそんなにたくさん生えるんですか。

根本幸子：出るんです。はびこるんです。

ー農薬を使ったら、あまり雑草は出てこないのでしょうか。

根本幸子：大丈夫なんです。

根本洗一：こない。うまいこと使えば、稲はそのまま、雑草だけを専門に殺す薬があるんです。

ーじゃあ、やっぱりみんな農薬を使いますよね。

根本洗一：あれはいい。

根本幸子：だから、どこの田んぼもそんなの（手刈りの草取りをする必要）は今はない。うちの田んぼだけです。

★震災前の原子力発電所

ー震災前は原子力発電所について、危ないと感じていましたか。

根本洗一：危ないってみんな分かってるんだな。おっかないものって。放射能のモニタリング（装置）っていうのかな。あったんだよ。

ー測る機械が。

根本洗一：ここにもあったんだよ。今のやつとは違う、簡単なやつだけど。「何だこれ？」って言ったら「放射能が」っていうことで。

そもそも放射能っていうのは体によくない。例えば、レントゲンだって簡単に撮れない。あと、放射能は、遺伝子を換える。特に野菜とか田んぼの場合は、コバルト 60（からの放射線）を放射して品種改良やったんだから。あんまり俺は作らなかったけど、みんな（放射線を利用して品種改良した作物）を作ったんだわ。結果的にはやめたけど、それはみんな、生物（の遺伝子）を換えたということを認識してるんだ。

ーなるほど。

根本洗一：原発があれば当然それが出るということだったから、危ないって言ってこの辺の人たちは原発に反対してた。農協の総会でも反対決議されて、そんなことがあった。青年団活動で原子力に関する討論会があったり、あと、政党討論会。そんなことを青年団でずっとやってたんだよ。だから、しょっちゅうこの辺では原発反対集会があったんだ。私は仕事が忙しくて（集会には）行かなかったけど、（原発には）反対でした。ただ、やっぱりそれ（原発の安全神話）に染まっちゃったんだな。

－何となく危ないとは思っているけど、でも、事故は起こらないだろうと。

根本洗一：起こらない。この日本の技術全て、科学もモノ作りでもすごいわけだから。だから、それを信用したんだな。

－浪江・小高にも原発の計画がありましたよね。

根本洗一：計画、あったんだよな。最後まで反対者がいて、できなかったんだろうな。

★震災時の避難と小高の様子

－震災の時の話をお伺いします。2011 年の 3 月 11 日は、こちらに皆さんおられましたか。

根本洗一：あの日はグループで税金の申告、集団申告っていうのをやってたんです。だけど、俺はその時忙しかったから行かなかった。肥料としてくず大豆も使うんだけど、この時買ったくず大豆は殻がいっぱいあったから、その殻を取る仕事をしてたのよ。それをやってて、3 時頃だな。

－午後 2 時 46 分ですね。

根本洗一：地震になって、「うん？」なんて。あの頃もしょっちゅう地震あったもんな。だから、「うーん」なんて言ってて。でも、長いんだな。ちょっと危ないなと思って外に出てトラクターをつかんだら、今度また揺れて、「おー」と思って。あれなんぼ（どのくらいの時間）だったのかな。

－結構長かったですね。

根本洗一：長かったよ。2 分では利かないべな。で、うちも最初はここにいたのよ。息子もうちの家内も、嫁さんも。あと、子ども（孫）も 2 人いて。あと 1 人（の孫）は小学生だから学校にいたんだけど、うちの息子が迎えに行って帰ってきて。

根本幸子：もうその時には学校の下に津波が来てたんだそうです。だから、私どもはその少し上のほうを通過して帰って来ましたが、海のほうに帰る方、村上っていう海の近くに帰る方は駄目だった。

－そうですか。福浦小学校ですよ。

根本幸子：そうです、福浦小。井田川の、学校の前に郵便局があったんです。もう郵便局は水に浸かって。学校は少し高くなってるから、運が良かったのね。一番下の孫はその時小学校にいて。

－怖かったですよね。

根本幸子：「迎えに行こう」って言ってパパは行って迎えてきたんですけど、後で聞いたら、村上の海のほうに帰る方は亡くなったっていうお話でした。

根本洗一：そこの（国道）6 号線を見に行っただの。そしたら道路のここまで水が入ってて、がれきがいっぱいあるんだもん。あれはびっくりしたな。

根本幸子：そうなの。あれにはびっくりしました。「見ておけ」ってお父さんに言われて、あたしたちもみんなで行って見たけど。

根本洗一：見とくのは大事だから見とけて言って。やんだって言う人もいたけど。

根本幸子：でも、行ったんです、子どもたちも。そしたら、もう道路スレスレに水が来て。あの時はお家達の冷蔵庫だの。

根本洗一：タブタブってな。

根本幸子：みんな、あれにはもうびっくりして。どうするんだろうって思った。

根本洗一：あれにはびっくりした。そして、帰ってきて。そうしたら、みんな南のほうを見てるんだよ。

ー南のほう。

根本洗一：なんだべなと思ったら、向こうの原発（福島第一原発）。帰ってきて、俺、個人的に一通り見ようと思って、請戸に行った。今度はすぐ行ったんだな、請戸入るとこまで。

根本幸子：行ってみただけど駄目。

ーそうだったんですね。

根本洗一：帰ってきたら、うちの息子が「米ねーか」と。炊き出しをやるのに米ねーかって。

根本幸子：夜まで炊き出しをしたりしたんです。私のところはガス釜だから 10 分で炊けるんです。

根本洗一：あとは、日中、昼間に小高町（小高区役所）に持っていった。あの頃は小高町では避難者のために、布団とか毛布とかいっぱい集めてたのよ。

でも炊き出しを持って行ったのに、あんまりいい顔しねーんだな。あの頃もう、ちょっと（原発の様子が）おかしかったんだろうな。もうそこに置いてって。それで、2 日目だわな。

ー2 日目、3 月 12 日ですね。

根本洗一：朝早くまた見に行った。もう一回請戸から双葉に行ったの。もう閉まっていねーのな。

根本幸子：双葉はもう全町で、夜に避難したから。

根本洗一：あのときはもう夜のうちに行ってたんだな。

根本幸子：で、帰りは渋滞です。

根本洗一：浪江の人が今度 114 号線、ザーッとになって（津島方面へ避難する車列で渋滞していた）。

あれ、でも、（何があったのか）全然分かんねーよな。

根本幸子：お祭りがあるのかと。何でしょう、「今日はお祭りがあるのかな？」って。

根本洗一：あと、防護服。

根本幸子：そう、防護服の人が立ってたのね。

根本洗一：警察だか東電だべか分かんないけど。

根本幸子：浪江の方たちは津島に避難する。だけど、避難とは思いませんでした。何でこんなに混んでいるんだろうって。

根本洗一：そして、帰ってきたら「ここももしかしたら」ってことを、やっぱりみんな心配してたんだな。

根本幸子：気のある人は南のほうを見てたって言うんです、後でお聞きすると。原発のほうを見てたって言うんです。だけど、私らはそんなこと分かんなかったね。

根本洗一：そして今度は、部落全部で原町の馬事公苑へ行ったんだ。

－12日に原町に避難されたんですね。

根本洗一：大体まとまって。

根本幸子：部落全体で行ったんです。馬事公苑、あそこは高くて広いですから。だから、そこへみんなです。

根本洗一：行って12時までいたのかな。

根本幸子：ガソリンスタンドでずっと並んでました。「何でこんなにみんな並んでるの」なんて言っ
て。もうのんきですよ。お父さんが「何、みんなガソリンスタンドどうしたの」って言うぐらい皆
さん並んでました。

根本洗一：俺は分かんないから。ガソリン満タンにすればいいのかな、なんて。

根本幸子：分かってる人は分かっている。私たちはまず能天気でした。

そうしたら、会津のお友達から電話が来ました。「そこにいないで早く会津に来なさい」って電話
が、12日の午前中に来たのね。「うちは大丈夫です、地震でそんなに壊れませんでした」なんて言っ
てたら、そうじゃない。彼女たちは原発を心配して、「早く来なさい」って言ってくれてたんです。

根本洗一：放射能の心配してたんだな。

－なるほど。

根本洗一：「今は大丈夫だ」なんて言ってたけど。

根本幸子：「大丈夫だ」なんて、何が大丈夫か分かんないで。あの時は本当に何が何だか分かんない
で右往左往しました。でも、やっぱり一応、体育館には避難したんです。

－3月12日の夜ですか？

根本幸子：夜に、体育館に避難したんです。

根本洗一：石神小学校。

根本幸子：原町の石神小学校ね。でも、それもすごい渋滞で、町中がひっくり返ったようでした。道
路に詳しくあったから早く着くことができたけど、あれ知らなかったら大変でした。

根本洗一：みんな集まるから、避難所はもう歩く場所もないの。

－そうですよね。小高中の人があちこちに分かれて。

根本洗一：そう。

根本幸子：あれ小高だけだったの？ 原町の人もいたの？

－原町の人もいたんですか。

根本洗一：そう、いたべな。20キロ圏内は。

根本幸子：20キロ圏内は、そうか。

根本洗一：30キロ圏内は屋内退避。あと、20キロ圏内は全部（避難）。

ーそうでしたね。3月12日のお昼にまず部落全体で馬事公苑に避難して、一度戻ってきたんですか。

根本幸子：戻ってきたの。

根本洗一：大丈夫だと思って。

ー戻ってきたけど、やっぱり夜にはもう一回避難して。

根本幸子：そうなんです。原発にお勤めしている人は、もう3時ごろからいなくなったそうです。避難してって言われた時は、区長さんが言って歩いたのかな？

根本洗一：区長がしっかりした区長だったから。若い人、原発は危ないっていうことみんな分かっているから、区長さんが直接歩くんじゃないかって、お互いにやる（避難を呼びかける）とか。

ーなるほど。

根本幸子：あれは町で避難しなさいって言ってきたの？ 言ってこないの？

根本洗一：言ってきたのかな。

根本幸子：自主避難だった。

根本洗一：多分（12日の）夜、夕方（に避難指示が出た）。

根本幸子：暗くなるの早いですよね、もう。

根本洗一：12日の朝早い時点で、浪江の10キロ範囲はもう避難だったな？

ーそうです（3月12日の朝5時44分に国が半径10km圏内に避難指示。同日18時25分に半径20km圏内に避難指示）。いろいろなことがあったんですね。

根本洗一：やっぱり、東電とかそういうところに行ってる人は状況分かっているから。

根本幸子：そういう人は遠くに行きました。

根本洗一：いきなり京都とかあっちのほうに行きました、九州とか。石川に行ったり。

根本幸子：知ってる人は。

ーパニックでしたね。

根本幸子：でも、会津にいいお友達がいたから「すぐ来なさい」って言われて。あの頃は、電話かけて「行きます」っていうのも、電話も通じない。

根本洗一：それが12日の夜。13日か？

根本幸子：13日の朝。

根本洗一：13日の朝だな。

ーじゃあ、石神に一晩泊まって。

根本幸子：そうです。

根本洗一：二晩泊まった、二晩。

根本洗一：13日の夜、もう一回こっちから電話したの、今度。俺、携帯なかったもんだから孫に借りて。そしたら、通じたの。12時ごろ通じたのかな。14日の朝9時ごろ行ったのかな。

根本幸子：そうだ、9時ごろだね。

根本洗一：二本松に行って、会津若松の駅に12時に待ち合わせして行ったんだ。

根本幸子：たまたまその方は大地主さんで、お部屋がいっぱいあったから。そこのお部屋が空いてたんです。「ここに来なさい」って言われて、（会津）若松に。

根本洗一：若松の門田町。

根本幸子：おばあちゃんが1人で住んでらしたけど、2月に亡くなったって。そのままになってて、「お骨もあるけど大丈夫？」って言うから「大丈夫」って言って、お世話になって。

ーなるほど。

根本幸子：もう何からかにかから、全部用意していただいてありがたかったです。

根本洗一：そうして行ったら、灯油とガソリンとみそと米と野菜ともらって。

根本幸子：ありがたかったね。

根本洗一：3日ぶりにお汁。うまかったな。あれは忘れられねー。

ーその会津若松の方は、ずっと長いお知り合いなんですね。

根本幸子：長いお付き合い。

根本洗一：有機農業の仲間だから。

ーそれは心強いですね。

根本洗一：だから。こういう時はいがったなって思ったわ。

根本幸子：心強かったです。助けられました。

1か月会津でお世話になりました。会津に行ったら雪がドッサリあって。毎朝、チラッと雪降って真っ白になる。暖かくなると雪がドサッと落ちて、「何、あの音は？」って。ここではできない体験を会津でしました。

根本洗一：4月の14日までいたのかな。14日、今度は相馬へ行った。

★相馬での避難生活

ー相馬での生活について教えてください。

根本幸子：相馬にいとこのうちが空いてるっていうことが分かって、4年間お世話になりました。相馬はとても便利でいいところでした。

根本洗一：街中で、役所も近くて、店も近い。なんでも近くて便利なところだった。

ー相馬に避難している間、小高の田んぼや畑は気になりましたか。

根本幸子：そうなんです。だから、もうお父さんは毎日通った。

根本洗一：体を動かさなきゃ駄目なんだ。相馬行ったらすぐ今度、こっち（小高）からいろいろ道具持ってって、米ぬかとかくず大豆とかツルハシとか鍬とか持ってって、ほんで、ちゃかちゃかっつつついてカボチャとナスを植えたり。

根本幸子：キュウリも植えて。

根本洗一：ニンジンとトマトと。それがよくできんだ、また。

根本幸子：(相馬の) 家のすぐ隣が空き地だったからそこで。

根本洗一：2011 年の 7 月頭だっけかな。有機仲間に「会津さ来い」って言われたの。「大豆のまき方を教えてくれ」ってことで行ってきた。そのころ、うちの息子は相馬さいたから、息子の同僚から相馬と新地の境にある畑貸すって言われて。あすこまで 10 分ぐらいかかんのかな。今度はそこで本格的に野菜作りやった。皆さんにお世話になりました。

ー小高への一時帰宅は何度かいらしてたんですか。

根本洗一：それは 2011 年に。やっぱりみんな田んぼがどんななってるか気になるわけだ。用排水が止まってるか心配だっていう理由で、各部落から 2 人ずつ東電の許可もらって、集団で入ったのな。そのうち今度は個人的に入ってもいいよということになって、家を片付けたりいろいろやって。

ー2012 年はどうでしたか。

根本洗一：2012 年からは今度、試験栽培。農協でやった試験栽培に立候補したんだ。田んぼとかカボチャとか全部で 5 か所作ったわけ。

根本幸子：生産組合があったから、仲間の人たちで。

根本洗一：相馬から小高まで行ったり来たり、車で 1 時間も 2 時間もかかるんだから。あと、12 年の 9 月から集団での草刈り始まったのな。だから、俺も請け負って 9 月 10 日から、田んぼの草全部刈って。

根本幸子：トラクター見えないぐらいの草だもん、すごかったです。自分は慣れてるからここが入り口だって分かりますけど、知らない田んぼだったらどこから入るんだっていう感じで。

根本洗一：1 年目は何てことない、2 年目からバーツと生えちまった。

根本幸子：すごかった、あれは。怖かったよね。

根本洗一：草刈って、いろいろ作って。ところが、秋になったら全部イノシシにやられて。いや、あれはびっくりした。

根本幸子：(ほとんどイノシシに食べられてしまったので) ハサミを持って、残ってる穂を探して刈ったんです。人がいない分イノシシが増えたんでしょうね。

ーなるほど。2012 年の放射線量はどうでしたか。

根本洗一：4 か所測ったんだけど、(基準値を超える放射線量は) 出なかったの。「出ねばいいな」って思ってたけども、ほっとしたな。畑もどこも何も出ねーから。あの心境は助かったっていうか、よかったなというか。

根本幸子：自信がきますもんね。だから次の年に作ったんです。

根本洗一：ところが、2013 年は出たんだな。13 年のほうがむしろ出た。うちで作ったの(コメ)が一番(線量が)高かったんだよ。あの時は基準が 100 ベクレルだったんだけど、うち(のコメ)は 170 ベクレルだった。俺は前は出なかったし食べていいと思ってたから、食べたりしてたのよ。ところが出ちゃった。けども、出ても粳すりして精米すれば半分になるんだな。そうすると大体 50 ベ

クレルぐらいになるから、大丈夫は大丈夫だけど、全部捨てちゃった。

この時は東北農研でも（委託されて）作ったの。でも、これは駄目なんだなって持ってっちゃった。

根本幸子：持ってってどうするんですかって聞きました。そしたら、「廃棄物」って。お米が廃棄物って。情けなかったです。

根本洗一：あの時は悔しかった。

根本幸子：食べたかったですよね。だって、いい穂だったんです。

根本洗一：いい稲やった。

根本幸子：何でこんなにいい穂だって言うぐらいいい穂だった。情けなかったです。

－そうでしたか……。2014 年について教えてください。

根本洗一：14 年は今度、相馬に試験場できて、硫安（硫酸アンモニウム）だけとかいろいろやって比較したんだけど、硫安だけがあの時 15 ベクレルぐらいかな。普通の肥料でやっただけでは、ほとんど出ない。やっぱり肥料によって違うんだな。

－なるほど。2015 年はどうでしたか。

根本洗一：2015 年には、今度は大きい田んぼ作ったんだな。2014 年に有機農業研究会で被災者をどうするかっていうことになって、「酒米だったらいいだろう」ということで。酒米は削るから、例えば 100 ベクレルあっても半分になるんだな。その時に、出荷先として（郡山の酒蔵）仁井田本家を紹介されたの。ほんで、チヨニシキいいと思ってたから、これ作るかと思って作ったんだな。

－震災後初めての出荷はいつですか。

根本洗一：2015 年に仁井田本家に酒米として持ってったのが初めて。（避難指示の）解除前でも、栽培基準にあえばいいってことだな。

根本幸子：でも、やっぱり農協でちゃんと検査を受けて、そして出した。

－2016 年について教えてください。

根本洗一：16 年からきつかったな。有機の認定も申請したけど、何だかああでもねーこうでもねーって文句。例えば、マーカーとかちょっと短いとか、いろいろあるわけだな。これ全部自分で書いて出したら、駄目だって言われて。あちこち頼んでできなくて、最後は息子にやってもらった。そして 16 年に県の認証もらったの。農水省で決めた有機農業として認める基準、栽培基準とかいろいろ、取り扱い基準とかいろいろあんだけど、そこの中の基準があって、該当したっていうことだな。あと、16 年には東大の食堂にもうちで取れた米を提供しました。

－なるほど。相馬に 4 年間いらして、その後はどちらかへ行かれたのですか。

根本幸子：相馬が 4 年契約で入ったもんですから、今度原町へ行きました。

根本洗一：（2016 年 7 月の避難指示解除まで）何か月かいた。

★震災後の農業

ー震災・原発事故を経て、いま現在この地域の農業はどういう様子ですか。

根本洗一：もともと福島県の中でも会津と中と浜があって、浜通りは有機農家が結構多かったんだよ。けれども、震災後、結局、放射能で浜通りが駄目だというふうになって、消費者も離れたからだいぶやめたんだな。何人かは残った、俺も残ったほうだけど。俺のところは有機で。震災以降は、個人用に直売してる。

ー以前、震災前から根本さんのお米のファンが全国にいらしたと伺ったのですが。

根本幸子：全国っていうわけじゃないけど、大体、東京方面にいました。買っていてはいたんです、おいしいからということで。もう毎日のように荷造りして発送してって、やっぱり個人売りは忙しいです。でも、やっぱりどんなに忙しくてもちゃんと精米して作って。でも、震災後は皆さん離れました。

ーそうなんですか。

根本幸子：震災になってから付き合ってる人は本当に誰もいない。やっぱり、皆さん放射能怖かったんでしょうね。

根本洗一：怖かったんだな。

根本幸子：私たちが避難した後、電話にいっぱい東京から「大丈夫ですか」「元気ですか」って入ってきました。泣き泣き聞いてましたけど、皆さんにいっぱい応援してもらったけど、その後米を作ったからって、「許可が出たから食べられますよ」って言っても、どなたも（買ってはくれませんでした）。ただ、注文が1件だけありました。だけど、それはまた大変なの。

根本洗一：それは玄米食なんだわ。食の店屋さんな。そこにやったら、向こうで測るわな。そしたら、出ただって、放射能2ベクレル。

ー2ベクレル。全然大丈夫じゃないですか。

根本洗一：全然大丈夫だわな。ところが、カリウムも出たと。カリウムはそもそもがあるわけだから。

ーそれで駄目って。それは出ますよね。カリウムは元々、肥料に含まれていますよね。

根本洗一：そうだな。

根本幸子：都会の人は理解できません。

ーじゃあ、もう分からずに何かが出たからっていう理由で、結局断られたんですか。

根本幸子：戻ってきました。

根本洗一：向こうで、多分、役所が測ったんでしょう。そういう人たち（が求めているの）は0ベクレルなんだわな。でも、福島でなくてもどこでも、0ってないんだよな。

そんなことがありました。でも、今は何とか経営は成り立っております。

ー2016年7月の解除で戻って来られて、今はお米や野菜も作ってるんですよね？

根本洗一：野菜は自家野菜。

根本幸子：野菜もお父さんは作るのが上手なんです。だから、いつもいっぱい作って。

根本洗一：余るんだよな。

根本幸子：あの頃は皆さんに配ってた。だけど、この頃は処分に困るから、もうそんなに作らないでくださいって。

根本洗一：今の人は野菜食べねーな。今年は3分の1にしました、タマネギもニンジンも全部。

根本幸子：それでもいっぱい作る。

ーおいしいですもんね。昨日、haccobaさんで食べてきたんですけど、「根本さんちの野菜もいくつか使ってるんですよ」っておっしゃってて。

根本幸子：そうなんです。「いっぱい取れるからどうぞ」って言って持ってってもらったり、お米買っていたいたりしたね。

ー今年、お米はコシヒカリと福笑いも作っておられるんですか？

根本洗一：福笑いは作らない。作ろうと思ったけど、うちの息子が「福笑いは福島県の基準をクリアするの大変だ」って。福島県はかなり厳しくて、もう絶対いいっていう中身でやないと、評判悪くなったら駄目だからって、ものすごく基準を強くしたわけ。指定されて、指定されたように作って。だから、コシヒカリと天のつぶと雄町と愛国を作った。愛国って昔の品種で、冷害に強い品種なんだな。

根本幸子：初めて作ってみましたが、倒れなくて、とてもいいお米で、

ーそうなんですか。どうして「愛国」をつくることになったんですか？

根本幸子：酒米の方に作ってくださいって言われて、作ってるんです。

根本洗一：ぷくぷく醸造の立川さん。

ー原発事故直後、十分な情報もないまま避難することになったと思います。避難した当時、小高にはすぐに戻ってこられるだろうと思っていましたか？ それとも、もう二度と戻ってこれないかもしれないと思っていましたか？

根本洗一：ちょっとすれば帰れると思って原町に避難したわな。いつでも帰れると思った。全然、帰ってこれないっていうのは頭になかった。もちろん「安全だから」っていう、東電の安全神話を信用してたから。ひどいな。元々、農協で反対運動があったから署名やっぺと思って署名集めた。署名の用紙もらっているんな家当たったんだよ、何軒か。ほしたら、たまたま双葉通ってる人がいて、「何これ？」って。全然問題意識ないんだな。いや、ほうかなと思って。ほれでやめたよ。そんなことで大変だったな。安全神話があったから、離れる気はなかった。そしたら、後から分かったことだけでも、ここは（空間線量が）低かった。だから全然大丈夫だったんだよな。

ー以前から安全にこだわって農作物を作ってたんですけども、震災前後で農業と食の安全そのものに対する思いや意識に何か変化はありましたか。

根本洗一：震災前は安全第一だったということ。農水省のJAS法にのっとった中身でやったんだけど、震災後はこれだけではねーんだな。環境とか、それからいろいろ、今のはやりの、それも考えるようになったな。田んぼも自然の状態でお互いに作ってみようっていう。自然という関係、特にそのところは思うようになりました。

ーなるほど。

根本洗一：だから、自然の生物の中で害虫とわれわれが勝手に決めてても、本当はあの虫たちはお互いに食うや食われるやでいる世界だからな。ただ、われわれは害虫と見るわけだけども、でも、そういうものも見erようになったな。昔、こう言った学者がいたんだけど、「農学栄えて農業滅ぶ」（東京農業大学初代学長・横井時敬氏の言葉）って。今はそれが真実だと思います。例えば、カメムシを殺す薬があるわな。ニコチノイド系の薬。あれって世界で問題になってるんだよな。世界の各地ではやめてるのよな。日本ではあと5年ぐらいやるのかな。その害というのは、例えば、ミツバチ。今ではその姿を見なくなっている。それと同時にマメ作ってるっぺ？ マメ作る時にカメムシを退治する、これは農学だわな。昔は多少被害あってもマメになったんだよ。今は全然駄目なんだな。

根本幸子：マメって大豆ね。

根本洗一：震災後、3年ぐらいは豆作れたのよ。1年目から作ったかな。最近は何ぼ作っても駄目なんだよ、カメムシにやられて。早く作ったり遅く作ったり品種変えたりいろいろ試験してんだ。でも、最後は駄目だな。カメムシにやられて、実はあるんだけどベチャッとなっちまう。だから、今年もまく時期、品種いろいろやったけど駄目だ。来年はどうするか、またいろいろやってみるけど。

根本幸子：イナゴもいないの。昔は稲刈りの機械でコンバインで刈って、タンクがいっぱいになるまでは運転手は暇だったから、袋を持ってイナゴ取りしてた。でも、今はそんな袋持ってって取るほどいないでしょ？

根本洗一：今はない。

根本幸子：昔は本当にバタバタバタッて。

根本洗一：トンボはいるんだよな、トンボは。

根本幸子：イナゴもいない。ホタルはもちろんだし。

根本洗一：ホタルは悲しかったな。いっぱいいたんだ、ホタル。

根本幸子：自然がだんだんなくなってしまってこれは悲しいね。

ーそうですね。

根本洗一：俺、何でも作ってるからカボチャも作ったの。俺のカボチャはどてかぼちゃ。昔、戦争中、何もねーからこの辺ほじくって、そしたら種植えて、それ育ててずっと実がなったんだよ。でも去年、2年前からかな。花咲くんだけど実なんねーんだよ。なんでかと思ったら、ハチがいなかったんだな。

ー受粉しないということですか？

根本洗一：そう。しょうがねーから種植える時期遅くしたわな。今までは、早く植えて早く取ろうって考えだったけど、今年は遅くまいた。5月になってからまいたんだ。そして、5月下旬に花が咲くんだな。だから、自然っていうか。昔はいっぱいハチ、ニホンミツバチとかがいたから、いつ植えてもちゃんとできたわけだ。今は時期を考えないと。完全に自然はなくなったんだな。



★若い世代に伝えたいこと

ー最後に、若い世代の人に教訓として伝えたいことはありますか。

根本洗一：教訓なんて何もないよ。でも、やっぱり、ごまかさないで自分らしく生きることじゃないのかな。負けるが勝ちっていう言葉もあるけども、攻撃されたらば、一度負けてもいいから頑張りましょうって。何か今は、俺から見てっと、最初っから負けてんじゃないの？（って思う。）突っ張ることがねえんだわ。突っ張ることが。

ーそうですね。今の若い世代はみんなおとなしいかもしれませんね。

根本洗一：なあ。だから、ただ、流れに無条件に、無批判に流されんのはどうかなっていう。やっぱり自分らしく物事を常に考えて、自分を見失わないことが必要かなっていう気はすんだけど。俺は突っ張ってきたからな。

ー根本さんがおっしゃると、すごく重みがあります。ありがとうございました。

★インタビュー後、根本さんよりお手紙を頂きました。ご本人の許可を得て掲載します。

父のこと 二宮尊徳の教え

- ・ 人間が生きられる条件、衣・食・住の三つ。

百姓は食を担う大事な仕事である。

それと、分度の中で暮らさない。

（至誠、勤労、分度、推譲）

- ・ 20 代中頃、サークル活動で、地域全体が良くなければ個人の幸せはないと知り、農家の生活向上のため努めて来た。

- ・ 2011 年以降、小高区の農作物は持ち出し禁止された。

自給野菜は例外。

自給野菜を作り、自家消費と同時に、来た人を畑に案内して与えた。

（常に放射能検査あり）

- ・ 2023 年は異常高温のため、これまでの技術では対応できなくなった。

2024 年は昨年の反省から、播種期、品種…等を変えて、これまで以上の成績を得たが、大豆だけはカメムシの被害を防げなかった（農薬を使えば簡単だが）。

- ・ 2025 年（今年）も新たな栽培形態で挑戦する。

百姓は毎年一年生で、終生現役でいられるため、元気でいられる。

ありがたい。

2025 年 1 月 14 日

【学生の感想】

インタビューの中で特に印象的だったのは、洗一さんの勉強熱心な姿勢です。農家さんは体力も必要なのに勉強もされていて、洗一さんは努力家でかっこいい方だと思いました。また、原発事故によってお米を捨てなければならない、震災前の顧客が離れてしまうなど、農家さんならではの苦労があったことを学びました。一人ひとり、立場も経験なされたことも全く違うからこそ、被災者とひとくくりにせず一人ひとりに目を向けることが大切だと感じました。小高で食べたものは全部とってもおいしかったです。また、洗一さん、幸子さんをはじめ、小高に関わらせていただいた方々は皆さん小高愛にあふれていて、温かくて素敵な町だと感じました。

行政政策学類 1 年 菅野結花

今回のインタビューの中で、幸子さんが「(洗一さんは) 暇さえあれば勉強している」と仰っているのを聞いて、洗一さんの有機農家としての熱量を感じました。毎年毎年有機栽培ならではの課題が現れると思いますが、米作り 70 年目になる今もよりよい農業を模索する姿に感動しました。福島県産の食べ物をより多くの人に知ってもらえるよう、将来は農家を財政や広報の面で支援できるような仕事に就きたいと思いました。

行政政策学類 1 年 夏堀響生

洗一さん、幸子さんのお話を伺って、震災以前から有機栽培に向けて真剣に取り組まれ、震災後も JAS 認定取得、地域の勉強会への参加など、安全なものをつくるためのより一層の活動をされていることが印象的でした。アーカイブ作成に関わることで、小高でしか学べないことは何かについて考えながら取り組むことができました。今後食について学ぶ際に今回の経験を活かしていきたいと思います。

食農学類 1 年 松野綾

今回のインタビューで最も印象的だったのは、試験栽培で作ったお米を廃棄したときのことを語る根本さんの悔しそうな表情です。農業を愛し、妥協することなく農業を学び、常に安心安全な有機栽培に取り組んできた根本さんだからこそ感じる悔しさ、やるせなさだと思いました。今後は、風評の払拭に関して大学生でできることを探していきたいと思いました。

行政政策学類 1 年 斉藤優人